

《出品目録》

[書画]

すべて富岡鉄斎筆

番号	名 称	制作年	年 齢	寸 法(縦×横)	材質・技法	員 数
1	名花十友図	慶応2 (1866)	31	122.0×50.5	紙本着色	1幅
2	間有趣帖	慶応4 (1868)	33	各13.5×19.8	紙本淡彩	1帖
3	鶴図・亀図	明治時代	50代	各12.2×38.2	紙本着色	2本(扇子)
4	富貴国香図	明治時代	50代	117.0×48.6	絹本着色	1幅
5	憚南田墨帖	明治30 (1897)	62	各29.4×15.4	紙本墨書・着色	2帖のうち
6	鶏図	明治30 (1897)	62	124.3×34.3	紙本淡彩	1幅
7	おどけ画	明治34 (1901)	66	各12.0×16.3	紙本淡彩・墨画	1帖
8	蟹譜	明治42 (1909)	74	各21.2×20.0	紙本墨書・着色	1帖
9	静観楽事帖	大正3 (1914)	79	各10.7×25.3	紙本着色	1帖
10	鷺図	大正4 (1915)	80	140.3×55.7	紙本淡彩	1幅
11	菊花図	大正4 (1915)	80	36.4×48.3	紙本着色	1幅
12	猛虎図	大正6 (1917)	82	141.8×53.3	紙本着色	1幅
13	模花山茶水儂華図	大正9 (1920)	85	47.0×57.5	絹本着色	1幅
14	蘭図・梅図(表・裏)	大正11 (1922)	87	13.5×43.3	紙本金銀泥	1本(扇子)
15	歳朝図	大正11 (1922)	87	132.6×32.4	紙本淡彩	1幅
16	水郷清趣図	大正12 (1923)	88	130.7×31.0	紙本淡彩	1幅
17	朱梅図	大正12 (1923)	88	150.4×40.1	紙本淡彩	1幅
18	花鳥図	大正13 (1924)	89	133.9×33.1	紙本淡彩	1幅
19	富而不驕図	大正13 (1924)	89	38.0×28.0	紙本着色	1面

[器 玩]

番号	名 称	作 者	制作年	寸 法(縦×横×高)	員数
20	梅花式磁鉢	富岡春子作・富岡鉄斎筆	大正6 (1917)	10.2×10.2×5.5	1口
21	狸香合	富岡鉄斎作	大正9 (1920)	6.5×5.8×6.2	1合
22	竹詩画团扇	富岡鉄斎筆	大正13 (1924)	各41.7×32.0	2本のうち

・次回展覧会

ご即位記念「天子知名-皇室と鉄斎-」

前期：2019年10月6日(日)～11月11日(月)

後期：2019年11月16日(土)～12月25日(水)

会場：鉄斎美術館別館「史料館」

清荒神清澄寺 鉄斎美術館

〒665-0837 兵庫県宝塚市米谷字清シ1番地 Tel.0797-84-9600 Fax.0797-84-6699 <http://kiyoshikojin.or.jp>

令和元年6月21日 印施

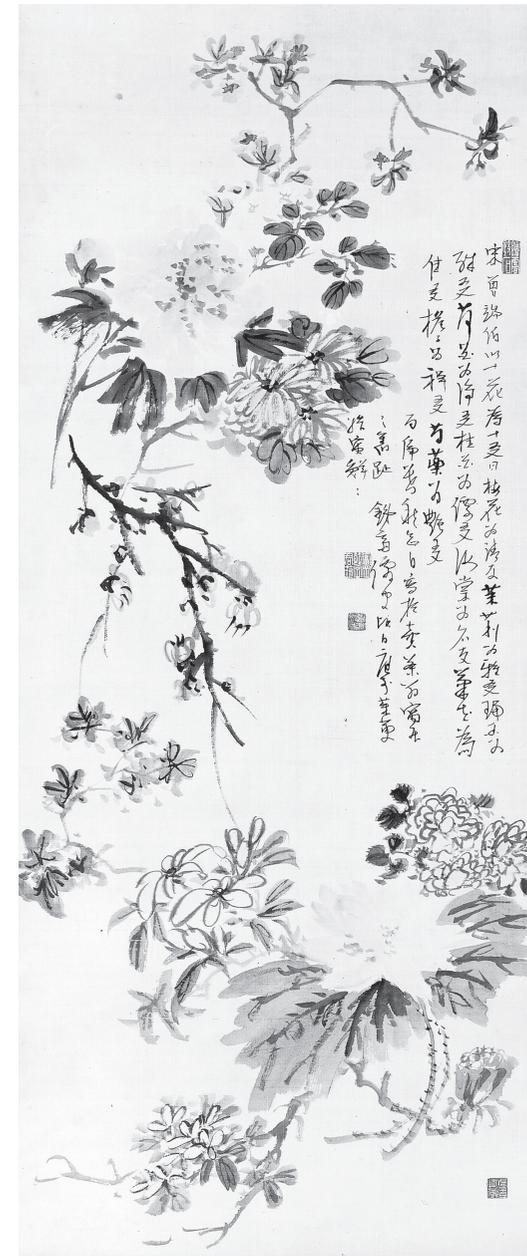
鉄斎の花鳥画

前 期 2019年6月28日(金)～8月1日(木)

後 期 2019年8月19日(月)～10月1日(火)

会 場 鉄斎美術館別館「史料館」

開館時間 9時30分～16時30分 会期中無休



1 名花十友図



18 花鳥図

花木（花卉）、草木、動物、虫魚、蔬果、あらゆる生き物を対象とする花鳥画は、中国宋代に大きく発展し、山水画、人物画とともに広く享受され、日本の文人たちも好んでこれを描いた。江戸中期には、長崎へ来航した清の画家・沈南蘋の影響を受けた細密な描法を主とした画風が流行し、同後期に入ると、博物学や本草学の隆盛を背景に、より色鮮やかで写実的な表現が主流となっていく。

万巻の書を読み、和漢の古書画に精通した近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）もまた、中国から連綿と続く伝統的画題に取材する一方で、本草学、博物学から得た知識も作品に取り入れ、多種多様な花木、鳥獣を描いた。実際に、鉄斎が生涯を通して摸した膨大な粉本類の中からは、和漢の先人たちが描いた花鳥画に熱心に学んだ跡を確認することができる。晩年の鉄斎に師事して文人画を学んだ漢学者・本田成之は、その研究姿勢について次のように語っている。本田が初めて竹を描く際、鉄斎は、天下有山堂の『墨竹蘭石譜』、蔣和の『写竹簡明法』、李息斎、柯九思、呉鎮等の竹譜、肉筆本、さらに植物学上から分類した日本の竹を集めた『日本竹譜』、竹の横断面を書いた科学書などを貸し与えた。そして「苟くも竹一枚でも書こうとすればあらゆる竹を研究しなければ書くことは出来ぬ。何でも物は念には念を入れて精密に調べてやらなければならぬ」と話した。ありきたりの筆法を学ぶだけで蘭竹を描く南画家がほとんどのなか、鉄斎は、紀州熊野の蘭を二斗樽大の大植木鉢に二鉢も植えていたという。花鳥を描く際にも、一貫して学びの姿勢をとっていたことが窺えるエピソードである。花鳥画について「あれは婦女子に見せるものぢゃ」と鉄斎が語ったことはよく知られているが、決してこれを言葉通りに受け取ってはいけなだろう。

謎語画題　身近な動植物や、架空の生物がもつ生態的特徴、薬効等に意味を見出し、さまざまな組み合わせをもって描かれた花鳥画には、富貴、不老長寿、立身出世、子孫繁栄、脱俗隠逸といった吉祥を表す寓意が込められた。こうした謎語画題が織り込まれた鉄斎の花鳥画をいくつか紹介したい。



4 富貴国香図

宋の曾慥が、十の名花をそれぞれ十の友にたとえた言葉に基づく《名花十友図》(No.1)は、鉄斎31歳の筆になる。賛には、「(荼蘼を韻友となし、)梅花を清友となし、茉莉を雅友となし、瑞香（沈丁花）を殊友となし、荷花（蓮）を浄友となし、桂花（木犀）を仙友となし、海棠を名友となし、菊花を佳友となし、梔子を禪友となし、芍薬を艶友となす」とある。

少壮期の鉄斎が好んだ文人趣味が窺える33歳の作《問有趣帖》(No.2)は、小さな画帖となっていて、多福の意が込められた仏手柑、「花中君子」と題した蓮の花等が洒脱に描かれている。君子の高潔な精神を表す蓮の花は、鉄斎が繰り返し描いた画題の一つであった。88歳の筆になる《水郷清趣図》(No.16)は、みごとに開花した水辺の蓮と、身を翻すカワセミで画面が構成されている。賛には、宋の哲学者で蓮を愛した周敦頤の『愛蓮説』より「香りは遠くして益清し」の句を引用し、人格の清廉さを教えている。牡丹の花は、富貴の象徴としたことから、別名「富貴花」ともいわれた。50代の作《富貴国香図》(No.4)は、牡丹が風に揺れる様を濃彩で描き、賛には元の画家・呉鎮が牡丹図について述べた句を引いている。一方、89歳で制作した《富而不驕図》(No.19)は、大輪の牡丹を画面いっぱい描いた大胆な筆致が印象的である。



13 椋花山茶水僊華図

た名品である。百花に魁して咲く梅（椋）花、仙（僊）の字が共通することから仙人の象徴とされる水仙、そして春光を意味する冬の山茶花を絢爛に描いている。最晩年の作《花鳥図》(No.18)も同様に、新婚を祝す作品である。箱書には「此の図は新婚を祝うの意なり。尋常の花鳥の看を為す勿れ」と自書し、これが単なる花鳥画ではないと断っている。寄り添う二羽の小禽と、白い小花を毬状に咲かせる繡毬花の色の変化になぞらえた賛の意は、「緑の黒髪若い時から白髪になるまで、夫婦仲良くする」である。いずれにも、鉄斎が画中に託した夫婦円満と長生の願いを感じることができる。

先人に学ぶ　謎語画題に限らず、故事・逸話を題材とした花鳥図も多い。特に、晋の書家・王羲之が愛した鶯鳥を描く《鶯図》(No.10)、清の文人画家・惲寿平（号は南田）が得意とした没骨法の花弁を描き、画論『南田画跋』を抜粋して書した《惲南田墨帖》(No.5)等からは、鉄斎の多分野にわたる博識ぶりが見てとれる。79歳の筆になる《静観樂事帖》(No.9)には、清の姚若翼に倣って花弁を貼り付けた「奈良八重桜図」「鶯宿梅図」、清の画家・金冬心に倣ってインドの菩提樹の葉に描いた「羅漢図」、宋の覚範和尚に倣って槐の汁で描いた「梅花図」等があり、先人たちが用いた手法を実践する鉄斎の探求心と遊び心にあふれた作となっている。

本展覧会では、以上のような晩年の名品を中心に、妻春子との合作になる《梅花式磁鉢》(No.20)や手造りの《狸香合》(No.21)も合わせて紹介する。生命力に満ちた鉄斎の花鳥画をご堪能いただきたい。

（細里わか奈）

【主要参考文献】

本田成之「富岡鉄斎翁伝二」（『美術研究』第107号、1940年）。本田成之「富岡鉄斎と南画」（湯川弘文社、1943年）。今橋理子『江戸の花鳥画 博物学をめぐる文化とその表象』（スカイドア、1995年）。村越英明「鉄斎の花鳥画」展出品目録（鉄斎美術館、1998年）。宮崎法子「花鳥・山水画を読み解く 中国絵画の意味」（筑摩書房、2003年）。前田博司「鉄斎 吉祥画」展出品目録（鉄斎美術館、2004年）。奥田素子「鉄斎の祝慶画」展出品目録（鉄斎美術館、2007年）。柏木知子「鉄斎の粉本－本画にいたる道－」展出品目録（鉄斎美術館、2009年）。

祝慶の画　中国では、音通による語呂合わせが非常に発達し、いい意味に通じる同音の別字に置き換えて縁起を担ぎ、吉祥の句を表現した。元旦の意をあらわす《歳朝図》(No.15)は、大正11年（1922）の正月に描かれたもので、画中の百合根が「百」、柿が「事」、大きな橘が「大吉」に音通することから「百事大吉」を寓意している。また梅花を活けた瓶は、平安の「平」に音通し、新年を祝うにふさわしい吉祥尽くしの一幅である。

祝慶の念が込められた花鳥画の代表作には、《椋花山茶水僊華図》(No.13)が挙げられる。大正9年、孫娘の弥生と医師・伊沢三辰の結婚を祝して贈られ

た名品である。百花に魁して咲く梅（椋）花、仙（僊）の字が共通することから仙人の象徴とされる水仙、

そして春光を意味する冬の山茶花を絢爛に描いている。最晩年の作《花鳥図》(No.18)も同様に、新婚を祝す作品である。箱書には「此の図は新婚を祝うの意なり。尋常の花鳥の看を為す勿れ」と自書し、これが単なる花鳥画ではないと断っている。寄り添う二羽の小禽と、白い小花を毬状に咲かせる繡毬花の色の変化になぞらえた賛の意は、「緑の黒髪若い時から白髪になるまで、夫婦仲良くする」である。いずれにも、鉄斎が画中に託した夫婦円満と長生の願いを感じることができる。



10 鶯図